「20th Anniversary at 神戸」

Live Report

text by swing

kashi no kai

ここはまぼろしの街角だろうか。

名古屋ボトムラインで穿たれた杭は、僕の防波堤を粉々に砕いてしまった。

ひび割れた歩道を歩く。土曜日の昼下がりは人ごみにまみれながら、あちこちに影を落としている。いまだ晒されたままの傷痕。リアルに響く大地を削る音。生田神社を正面に見据える交差点を右に曲がると、新しくなった鳥居が視界に飛び込んでくる。以前より角張ってる、と、同行の友がポツリと呟いた。

道なりに左へ、すぐ右へ。一つ目の三叉路にたたずむ人影を確認し、僕らは歩みを止める。いまだ無言で待ち受ける、ライヴ・ハウスの黒い壁を目の前にして。

神戸チキンジョージ。１９９６年6月２２日。

入口前のあいも変わらず細い路地。交通を妨げないため、開場直前まではここに並ぶことを遠慮してくれと告げられる。周辺環境に対するライヴ・ハウス側の配慮だろう。続いていくための努力がこんなところにも見受けられる。膨大なエネルギーが必要なのだ。意思と欲望を貫き通すためには。

とにかく喉がカラカラだった。オール・スタンディングの長丁場に備えて喫茶店を探すことにする。スペシャル・ゲストもご一緒だ。偶然もここまで続けば必然ではないのかと勘繰ってしまう。誰か月の陰で舌でも出しているんじゃないか？チキン・ジョージの入口でまたしてもお会いできたのは架空楽団の黒瀬さん。２０周年のアニバーサリーは、本当にたくさんの"特別"を与えてくれる。（ref.FBEAT MES(20)#849）

話題は一足飛びに時間を遡る。川の始まりの一滴を探す旅路。生身の彼らを肌で感じ続けて来た黒瀬さんの言葉は、あの源流への道標。よみがえる根底の衝動。忘れたくない性なる欲望。タイム・リミットももどかしく、思いがけない至福の時を過ごす。

さぁ、行列を作る時間だ。僕らは再び黒い壁の元へ戻る。整理番号順に並んだ人波は、予想をはるかに越えていた。６００、７００、８００人！？チキン・ジョージってそんなに広かったっけ？

やがてゆっくりと動き出す老若男女。ライヴ・ハウスの狭い入口は熱風に煽られている。チケットの半券と記念品を手にフロアへ降りると、すでに前半分ほどが人で被われていた。これからの数時間に備えて、皆地べたに腰を降ろしている。次から次へと溢れて来る人の波。さほど広くもないこの空間。全員入りきれるのかと余計な心配が頭をよぎる間もなく、スタッフとおぼしき声がフロア中に響き渡る。

「立ち上がって前へお詰めくださーい！後ろの方が入れませーん！」

しばらくすると、文字どおり身動きできない状況が出現した。四方八方は林立する頭に囲まれている。みなユラユラと揺れながら、思い思いのそぶりを見せている。どの顔も笑顔に満ち溢れ、来るべき時を待っている。

背伸びしてステージの上を眺めてみた（僕は小柄なので、こうしないと最早前方が見渡せないのだ）。セッティングは先日の野音と同様だが、大きく異なっているのは、お互いの距離。岡田氏のキーボード・ブースからは慶一氏、武川氏のポジションに手が届きそう。真横にはかしぶち氏のドラム・キットが鎮座している。孤独はどこにも無い。強固な意志を体現するライヴ・バンドにとって、理想の密度がそこにある。

モニターからは先日の野音で収録されたとおぼしき宝石が流れている。シエスタとフルムーン・クァルテットの演奏だろう。ときおり青空へ染み込むような拍手を交えながら、数々のライダーズ・ナンバーがフロアを満たしている。

１９９６年の６月はあまりにも多くの出来事で彩られてしまった。交錯する百億の色が、今また胸内で暴れ出している。徐々にカラッポとなりつつある頭で、僕は幻想にとらわれ始めていた。主観にまみれた欲望と、それを見つめるすました後頭部。『早く始まってくれ。彼らに会わせてくれ』『始まりなんて来なきゃいい。今この瞬間をいつまでも味わっていたい』相反する思いがぶつかりあう度、思わず苦笑してしまう。バカですねぇ、我ながら。

フロアの灯が落ちていく。モニターの音量があがり、ヴァイオリンの調べが辺り一面に染み渡る。弦楽四重奏の『くれない埠頭』に湧きおこる歓声と拍手。ステージはいまだ無人のまま、主を待ちわびるインストゥルメンツだけが息をそっと潜ませている。固唾を飲んで見守るボーイズ＆ガールズ。次の瞬間、上手に人影が揺れる。ウォーッ！爆弾が破裂したかのような歓声の渦。膨れあがったエナジーがステージの上へと押し寄せて行く。悠然と旗を振りながら歩いて来るのは、まぎれもない彼らだ。ムーンライダーズ。２０年目の火の玉ボーイズ。

メンバーの名前を叫ぶ怒声が炸裂する。オール・スタンディングのフロアが波のように揺れている。

ひとしきりあたりを見渡したのち、６人はそれぞれの武器を手に互いの顔を一瞥する。準備オーケーだぜ、さぁ俺達も楽しんでやるぜって、無言で交わすカンヴァセーション。コンセントレーション。

ギャーォン！いきなり繰り出されたのはディストーション・ギターのストローク。ボトムの効いたバスドラとベース。２０年後の『あの娘のラブレター』はマッチョでタイトなリズムのキック・オフ。慶一氏の声がカチッと聴こえるのはＰ.Ａ.だけのせいじゃない。間違いない。この唄声が聴きたかったんだ。迷いの無いリード・ボーカルを彩る武川氏のファルセット。いつにも増して色っぽく迫る。元曲にほぼ忠実なアレンジにもかかわらず、押し寄せてくる圧力は圧倒的に大きいラウド・テイク。良明印のワイルド＆ムーディー・ギターが炸裂するパーティ・オープニングの間奏時、誇らしげに煽る慶一氏の言葉が頭の中でこだまする。

「We're MoonRiders!!」

オールスタンディングのフロアがいまだ爆裂する最中、武川氏のヴァイオリンと良明氏のギターが旋律を織りなしていく。そっとハンケチーフをかけるかのように被いかぶさる慶一氏のギター。「カモン、かしぶち！」のかけ声とともにファンキー・ベイベェなキーボードとベースがスネアと一体化して疾走し始める。『紅いの翼』は１９年の時を経てジェットを従えよみがえる。このタイトなビート感はどうだ？あくまでも生身の彼ら。まぎれもないミュージシャン。ムーンライダーズはライヴ・バンドだ。吐いた唾を拾って飲んでもいい。そう断言する。

あいかわらずボルテージが上がりっぱなしの良明・ザ・ダーティ・殺人ギター。片手を高々とあげつつフロアを見据えている。そして、来たっ！最強のツイン・リードを擁するバンドはこんな展開をいとも簡単にやってのけるのだ。武川氏のこの旋律を聴け！ヴァイオリンはここまで雄々しく吠えるのだ。彼の大きな体がくねるたび、背筋に電流が走る。「ギターッ！」慶一氏が叫ぶ。即座に最前列まで踊り出る良明氏。彼の周りだけ空気がズタズタに切り裂かれているよう。激しく鋭く繰り出されるフレーズの数々。その指には火花が飛び散っている。『ジェラシー』。

「賢明な聴衆諸君は... 」
慶一氏のＭＣ。昔から氏が好んで使っているという"賢明な"のフレーズ。この言葉もまたそれぞれの胸でコンパイルされているのだろう。

「今日はＡ１グランプリをおおくりしています」
"ウォーッ"と雄叫びがあがる。怒涛の熱狂はとっくに収拾がつかなくなっている。

「次の曲が何だか、わかるかな？」
飛び交う歓声。あちこちから声があがる。

「そうだ」そっと頷く慶一氏。

すかさず始まる、ワン・ツー・スリー・フォー、かしぶち氏のスティックが刻むカウント・ダウン。

ドンッという音とともに喧騒の波が弾け飛ぶ。ユニゾンで繰り出される、煽りたてるようなあのリフ。『スイマー』。クラッシュ・シンバルをビートの頭に打ち付けつつ、タイトでヘヴィーなドラムスが響き渡る。「ムーンライダーズはアルバムだとおとなしいですから」と語っていたのは黒瀬さん。ライダーズきっての耽美派、かしぶち氏の叩き出すビートは、そのニヒルな横顔（そういう印象を抱かせるんですよ、氏の楽曲は）とは対照的に、ホットかつステディなリズム・シーケンスを生み出してくる。ファンキー・ザ・徹・シェイキン（何言ってるんだか自分でもわからなくなってきた）キーボードが、フロア中の体を上下に揺らす。周囲で打ち振られる小旗が僕の後頭部を絶え間無く打ちつけている。縦横無尽に駆け回る良明氏と武川氏のツイン・リード。たまらない。これじゃ、こっちの体がもたない。気持ちはすでに火山で焼かれている。

溶岩のように荒れ狂うフロアを尻目に、立て続けのカウントが刻まれる。ディスコ・ビート？ハウス？そんなことはどうでもいいや。ドス、ドスと足音を響かせるキック。ファニーなギターのリフがあの曲のイントロを奏でたかと思うと、一転ハード・ロック調のカッティングがリズムをうねらせていく。『ＶＩＤＥＯ　ＢＯＹ』。最新式のヴィデオはボトムの重い８ビート。新生チキンジョージの高い天井をぶち破れとばかりにがなりたてるコーラス。フロアもステージもない。そこら中から沸き上がる声、声、声。ウォー、オゥ、ウォオゥウォウォウォー！フロント両サイドでシンクロ・ジャンプを披露する慶一氏と良明氏。両足を跳ねあげる仕草にカワイイッと悲鳴があがる。

シンバル一発、スネアが踊り出す。母なるベースの上で跳ねまわるヴァイオリン。『彼女について知っている二、三の事柄』。博文さんの朗々としたコーラスが響き渡る。この人の声は、しかし、凄い。存在感が桁はずれだ。あのサングラスの下の瞳を見てみたいとバカな思いに囚われてしまう。さぁ、この息も切れよとばかりにリピートされる慶一氏の叫び。血管が切れるんじゃないかと思うほどの"I love You"！王冠時代の終わりを告げるスーパー人力リズム＆ビート。

「こちらでは『よし』というのをなんと言いますかぁ？」

良明トークにあちこちから声がかかる。

「よっしゃ！」

「じゃ、それでいこう。ありがとうっ！」「よぉっしゃあぁぁ！」
「ありがとうっ！」　　「よぉっしゃあぁぁ！」

物販トークもさわやかに(笑)笑顔をこぼす戦慄のギター・マン。今年は足の骨を折ったりしないでね、と、ヘロヘロな僕の脳味噌が両手を合わせて拝んでいる。

「８０年代！」

慶一氏の叫びとともにアレグロなカウントが鳴り響く。うねり狂うファズ・ギター。突き刺すようにトランペット。光の速さで疾走するビート。期せずして沸き起こる"I can't live without a rose" の大合唱があらゆる空間に共鳴し始める。アルバムでは重要なアクセントとなっているスネアのフィルすら削ぎ落とし、ひたすら彼方へと向けて突き進むエナジーの塊。旅の孤独はどこにも無い。『Kのトランク』は今宵、その全てが解き放たれている。

「ブゥーン」両手をピラピラとなびかせ、おどけたポーズを決めてみせる慶一氏。オリジナルにほぼ忠実なリズム・ワーク。時折顔をのぞかせる博文氏のワイドなフレージング。機械仕掛けの片思いが、今、生身で全身で飛び回る『僕はスーパーフライ』。かしぶち氏の余裕の笑顔がまぶしいぜ。彼らがとびっきりのプレイヤーでもあるという事実を、今更ながらに思い知らされる。もう指の先まで喜びに震えてしまう。Damn!

武川氏のタンバリンが火花を飛び散らす。１６というより、８ビート。強靭にのたまり狂うグルーブは、４つでカウントするのが気持ちいい。ヤング・ブラッド・ジャック！たぎる血潮を吹き上げて『Ｙ.Ｂ.Ｊ.』。 鳴り響くサイレンは影を熱く焦がす。これは夢なんかじゃない。ファット・ボトムなリズムが下半身に火をつけて回るから、僕らはここで自分の躯に抗うのだ。もはや押さえることのできない衝動を喉の底から絞り出すのだ。

「ディック・マードックに捧げます」

慶一氏の言葉に続いて、またしてもカウントでスタート。スティックを交差するかしぶち氏。どこまでも、ザ・バンドなライダーズ。この曲を強く印象づけるシンセのリフを武川氏がユニゾンで唄い上げる。リズムはこれまたヒューマン・シーケンス。このオープン・ハイ・ハットの切れを聴いてくれ。いったい誰だ？かしぶち氏の音が小さいなんて言ったのは！(笑)『 Le Cafe de la Plage』で披露された永遠のビーチに捧げるコーラスも登場。生身の体でここまでみせてくれるとは思いもよらなかった『悲しい知らせ』(失礼)。

いや、もう先程から僕は打ちのめされっ放しなのだ。吐いた唾は飲み込めねぇって、他ならぬK氏も言っているじゃないか。「ムーンライダーズをライヴ・バンドだと思っている人がいるとすれば、それはあまりにも的外れな評価だと言わざるをえない」なんて、どの面さげて口にしたもんだね、え？おい、こら、おまえだ、おまえ！...そりゃ僕だ。(ref.MES(20)#522)

クリック(シーケンサーに合わせるためのガイド信号)導入以降の彼らしか体験していない僕は、あらためて月下の本質をみせつけられてしまった。三つ数えて目をつぶるから、ここでチャンスを与えて欲しい。とんでもない大ウソを公衆の面前に晒した罪。償いきれない後悔の念は、あと２０年の間懺悔し続けよう。約束する。断言させて欲しい。真実は一つ。こうだ！

最高のレコーディング・アーティストにして最強のライヴ・バンド。
それがムーンライダーズ。

「ムーンライダーズはライヴ・バンドだ。そしてより小さい場所でこそ、
その本領を発揮する。今でも、胸をはってそう言いたい」

僕の敬愛する方の言葉が胸に染みる夜。

野音は壮大な同窓会だったのか？いや、あれもまぎれもない彼ら自身であったはず。２０年目の一大イベント。捨て身のライヴ・アクト。遥かな遠近感がもたらす大気の壁が、暮れ行く夕闇を背に、オン・スクリーンで自走し始める。と、そこにはえも言われぬ桃源郷が現われてしまった。彼ら自身と、その場に居合わせた全てのボーイズ＆ガールズを巻き込んで。

今、目の前の彼らは、２０年目の確かな現実を手にしている。踏みしめられた足元に、固いステージの感触を味わいながら。これもまた、まぎれもない真実。置いていけない記憶の一つ。

「入院！」

慶一氏の言葉を残して、彼らは一時ステージを去っていく。

スピーカーから流れて来る１００％のデジタル・ビート。シーケンス・パターンを駆使した『ＣＬＩＮＩＫＡ』（大好きな曲だ！）が、フロアの熱に浮かんでいる。

ポッカリと、雲のように。

20th Anniversary at **神戸** (2)

「１０周年の時に怪我人が出たんで『入院』かいな？」

「あ、いや、『ＣＬＩＮＩＫＡ』作ってる時にかしぶちさんが倒れちゃったから...」

友の問いかけにボンクラ頭が反応している。今やチーズのようにとろけた脳味噌が、自分の口から出ていく言葉をモニターし始める。と、突然、僕は吹き出しそうになってしまう。いったい何だってんだ？

ああそうか、あの人ならきっと『そういう意味もある』なんて言いつつ、口元を緩ませたりするんだよな、ずるいよな(笑)、なんて思ってしまうわけだ。好きなように受け取ればいい、って。

だけどこいつは楽なことじゃない。表現者は断じて孤独だ。作品は自らの手を離れた時点で、受け取る者にその全てが委ねられてしまう。それぞれのフィルターを通され、各々のスピリッツにまみれるのが理。

「そうじゃない」と声をあげることもできる。「それでいい」と微笑む人もある。どちらも発する側の自由。享受するだけの僕らがとやかく言える領分じゃない。

ただ、できることならば、同じトランクを抱えて歩いてみたい、そう思う。強く願う。

伝わるべき全てを渾身で浴びる喜び、その胸の震えに痺れていたいから。

ウオォーッ！再び歓声が沸き起こる。短いインターバルで登場するのは慶一氏、武川氏、そしてかしぶち氏。なんてこった。かつて慶一氏が「もう二度とやらないだろう」と言っていた、アクゥースティック版の『鬼火』。野音での"世界初！青空に染み渡る○えぎ声"はどこへいったんだ？この落差は激しすぎるぞ。この肩透かしがライダーズだぞ。まいったな。ブラシを使っているかのように押さえられ、かつダイナミック・レンジの広いドラムス。思い浮かべて欲しい。あのヴァイオリンだ。クジラ節だ。問答無用に心臓を絞り上げる弦の調べ。ポツリ、ポツリと、喉の奥から言葉を締め付けるように零す慶一氏。静寂の海に炎が揺れている。ステージは早くも滲み出している。

軽く片手をあげながら立ち去る慶一氏。と、ドラムスを離れ、かしぶち氏がキーボードの前にすわる。はにかみながらこぼす笑顔。

「懐かしい曲をやります」

ピアノが奏でるイントロにホォーッ！と歓声があがる。このメロディー、この言葉たち。彼のせつなげな唄声にフロアは湖畔の静寂で聞き惚れる。あの名曲、『砂丘』だ。クラシカルなヴァイオリンが深く胸に染み込んでくる。野音での壮大な疑問符に対する答えだろうか。今日は誰一人として見間違えようが無い。この上ない、かしぶちロマンティシズム。頭のてっぺんから爪先まで浴びる虚弱な大空の疲労感。彼の世界には塵一つの曇りもない。

退場する武川氏と入れ違いに、良明氏、博文氏があらわれる。かしぶち氏も定位置に戻り、スティックを手にスタンバイ。

「アートポートです」

アクゥースティック・ギターを抱えた良明氏がそう告げると、待ち構えていたかのように歓声とかけ声があがる。博文氏が手にしているのもアクゥースティック・タイプのベース。ネックには白い骸骨が揺れている。

ギターをかきならしながら晴天を告げる良明氏。語尾を伸ばす、伸ばす、まだ伸ばす。イエーッ、の大歓声を一身に浴びながら、やっとお風呂につかる彼。もう一度、語尾を伸ばす、伸ばす、伸ばーすっ。女の子の足に触れた瞬間、ダンッ！とスネアが弾け飛び、イン・テンポで駆け出していく『トンピクレンッ子』。この人の手にかかればエレクトリックもアクゥースティックも関係無い。高々と右手を挙げてフロアを見据えれば、たちまち沸き起こるヘィッ！の大合唱。あらゆる胸に広がる絶景のイリュージョン。青空を突き抜けて叫ぶ。遥かな富士山に向かい吠える。ワッホッホ！

かしぶち氏、博文氏がステージを降りていく。笑顔を浮かべながらあらわれたのは岡田氏、そして再登場の武川氏。岡田氏は途中、博文氏の席（ステージ中央）で立ち止まり、マイクの前に腰を降ろす。

「あんまりツッコまないように。慶一はそういうの弱いから」

さきほど慶一氏にかけられた「若いっ！」というかけ声。岡田伯爵による会見発表の始まりだ(笑)

「あ、僕は大丈夫だよ。ってこういうこと言うからいけないのか(苦笑)」

一時の爆笑をふりまき、あらためてキーボード・ブースへ向かう岡田氏。ラグなピアノに導かれ、 "Three Graduates"による『ウエディングソング』がスタート。お風呂で火照った体を浜辺で冷やそうだなんて、実に彼らしい配慮じゃないか。リラックスした雰囲気が心地好いさざ波に姿を変え、フロア中を満たしていく。朗々としたスウィーティスト・ダミ声に、無数の頭が揺れている。星空の下、ビーチデッキでカクテルをかわすなんて、ハマリ過ぎのシチュエーションだ。カタパルトに乗せて今宵巡るは浪漫の旅路。野音の孤独は遠い思い出。浜辺に寄せては消えていく。

余韻に浸るフロア。ステージの上には残りのメンバーも登場。アクゥースティック・ムーンライダーズがその全貌をあらわす。

ギターのカッティングに続きドラムスがオン・ビート。ん？やけに前ノリだぞ。思いっきり突っ込み疾走ビートだ。思わず背伸びをしてドラム・ブースに視線を走らせる。と、なんとそこに座っていらしたのは青空ぶっ飛び良明氏。今や戦慄のドラム・マンと化しているじゃないか。太鼓の主、かしぶち氏といえば... フロントでカウベル？を叩いている。あー、博文氏のハーモニカが食道に火をつける。この喉元からこみあげてくる衝動をどうしようか。武川氏が厚い声量で唄いあげる『今すぐ君をぶっとばせ』。彼にかかると肋骨の欠けたこの涙曲も、やおら骨太な姿を見せてくれる。ありとあらゆるスケールがでかい。男は背中に大海原を背負っている。

かしぶち氏がドラムスに戻る。今度は博文氏のベースを手にしている良明氏。何度耳にしたことだろう、このピアノのセンチメンタル・フレーズ。突き放すような声の中に、孤独を愛する哀愁を込めた博文氏の唄。今宵の『さよならは夜明けの夢に』には、しかし身を切るような厳しさは見受けられない。娘をそっと見守る父親の温もりに溢れている。身を焦がす寂しさよりも無言の愛。武川氏のトランペットがその暖炉に薪をくべれば、岡田氏のピアノがそっと夜露を拭っている。稀代の詩人はジンの匂いをさせながら、じっと夜明けを待っている。

いきなり鳴り響くオーケストレーション。長い沈黙を打ち破った、壮大なプレリュード。『Who's gonna cry?』、Ａ１グランプリの再開だ。彼らのために何種類ものスピーチを送ってくれたアンディ・パートリッジ。イングリッシィズムによるメンバー紹介が、いつにもまして誇らしげに聞こえてくる。ソロ・セクションで際立たせた６人の個性が、強固な１つの塊へと戻る瞬間。

イッツァム〜〜〜ゥンラァイダーズ！

一瞬の静寂の中、スティックが刻むカウントだけが鳴り響く。生楽器で奏であげられる『幸せの洪水の前で』。深いリバーブのかかったスネアが重厚な余韻を醸し出す。噛み締めるように唄う慶一氏。からみつく波のようにヴァイオリン。悲しみはそこに置いていけとベースが大地を指差せば、気にすることは何も無いとギターが右手をあげる。立体感溢れるバンド・サウンド。透き通るほど繊細な音像が、白い大蛇のようなグルーブを織り成していく。

「ちょうど１年前、たいへんなことに遇いました。武川が唄います」

２本のアクゥースティック・ギター、ベース、ピアノ、ドラムス、そしてヴァイオリンが生み出す我が家の灯り。食卓を囲む笑顔の団欒。今宵、武川氏の唄声には重い記憶のカケラも見当たらない。『帰還〜ただいま〜』。彼の存在を強く悲痛なまでに知らしめた事件はすでに風化しつつある。彼らは何度も崖っぷちに晒されて来た。運が悪いの一言ではすまされないだろう。が、常に、そう今までずっとだ、その逆境を我が物とし、あまつさえ糧として消化してきたのは彼ら自身である。ムーンライダーズの名の元に発信されてきた数々の軌跡。振り返ればいつもそこに、強靭な自信と至高の歴史が横たわっている。

愛と誇りをもって語り継がれるであろう、今宵の２０ｔｈスペシャル・アクト。生身のＡ１グランプリが今その終わりを告げようとしている。

「セット・チェンジ！」

慶一氏がそう告げると、稀代のアクゥースティック・バンドはステージ袖に向かい歩き始めるのだ。夢覚めやらぬ歓声を背中で浴びながら。

20th Anniversary at 神戸 (3)

幽体離脱と言うべきか。自分を固体化してくれている肉体から、このフロアの溶岩で焼かれた意識が分離しつつある。不思議な浮遊感覚。

あっという間のＡ１グランプリだった。２０年を一足飛びに駆け抜けるタイム・トラベル。オール・スタンディングのフロアを包みこむ、凝縮された時間の花。ホールの高い天井に、光の速さで吐息が反射する。様々な年輪に刻まれた顔。一様に紅潮した頬。それぞれの想いが交錯する中、今、三たびホールの灯が落ちていく。

いきなり空気が沸騰する。あのマスクを装着した面々。ニューウェイブ・ザ・ムーンライダーズの登場。

サンプリングされたコーラスが荘厳に響き渡り、第三部の幕開けを告げる。バシャンッ！クラッシュ一発、スネアの連打で走り出す『スパークリングジェントルメン』。ギターがかき鳴らされ、アバンギャルドなシンセがのたうち回る。バラバラに解体されたアレンジ。フロアを切り裂くパンクなシャウト。

「ライヴのためにかきかえられたアレンジは、私達のお楽しみのひとつだった（滝沢　潤）」

往年のディーボ・バージョンをさらにパワー・アップ。飛び散る火花が、紳士の仮面を焼き尽くす。オーバー４０の火の玉ボーイズ。

かしぶち氏が声を張り上げ、ワン・ツー・スリー・フォー！ドーンとリズムが弾け飛ぶ。ちぎれんばかりに打ち振られる旗。博文氏の唄声で響くサイレンの音。『工場と微笑』が汗を散らし石炭を燃やす。ホールを飲み込むデーオーデーオーの大合唱。歪んだギターが鋼鉄を曲げ、打楽器と化した鍵盤が靴を叩き鳴らす。

ダーティ・ギターが奏でるあの日の空。　『青空のマリー』　は永遠の胸キュン・Ａ・ＷＥＥＫ。煮えたぎる大気を突き抜けるボーカル。良明氏のストレートな声が誰の頭上にも青空を広げていく。唯一無比のバッド・ボーイズ・コーラス。ラッパが呼び出すあの娘の記憶。１９８２年から今まで、焦がれ続けて来たこの透き通る景色。

あの野音の戦慄も彼らが仕掛けた暗号だったのか？今宵初めて大胆なクリックが走り出す。１６ビートのルージュに塗られた『いとこ同士』。微塵の迷いも感じられない岡田氏の唄。分厚いコーラスにステディなリズム。９０'s テクノロジーと肉体が融合した稀代の名曲に、薄まらない血が熱く燃えたぎる。

空気を切り裂くコーラス。即座にうなりをあげるハード・ドライブ・ギター。『Who's gonna die first?』。かしぶち氏のドラムがラウドに鳴り響き、博文氏のベースがボトムをガチッと受け止める。タイトなハウス・ビート。フロアは上下にシェイキン・ダンシング。立て続けに襲いかかる独りぼっちの玉子の逆襲。ジャパ・マフィンの『真夜中の玉子』。一転マッド・ギターが咆哮をあげ、急転直下で渋谷センター街に噛みかかる。天突く右手。月下の起爆剤、クレイジー・良明・オーガナイザー。からみつく無数の咆哮『渋谷狩猟日記』。

燃え上がるステージがフロアの溶岩と一体になり、そこかしこから火柱が吹きあがる。誰が最初にくたばるか、世紀の絶頂サバイバル・ゲーム。クリック・シーケンスなんざクソくらえ！どこまでも疾走し続けるバンド・ザ・月光下騎士団。ネバー・エンディング・ヒート。オン・ビート。

コントロールを失い暴走する熱狂。たたみかけるヤー！のエンブレム。百億の色が描き出す、今宵一夜のブルー・キングダム。『スカーレットの誓い』。アニバサーラリー・フラッグを振り回す武川氏。頭上をかすめて団結の旗が踊る。彼らの肉体は喜びを隠しきれないようだ。かつてこれほど楽しそうなムーンライダーズは見た事がない。目の前が突然滲み出す。押さえきれない慟哭が込み上げて来る。ここ数年、彼らと出会う夜には必ず隣にいた同居人。「何で、今、お前がここにいないんだ？」思わず呟いてしまう胸の底。なんという不覚。

他の誰にも真似のできない孤高の自嘲。くそったれ！は愛の言葉。万感の思いを込めて叫ぶ『Damn! MOONRIDERS』。フラット・ピッキング・ソロの後ブレイクするビートの炸裂、再び蘇るヤー！の誓い、仕掛けられた数々の月光が背筋に電流を走らせる。このカッコ良さ。言葉が見当たらない。陳腐で申し訳ない。本当にカッコイイんだ。ムーンライダーズはこんなにもカッコイイ。

雄壮なヴァイオリンが道を示し出す。漆黒の闇に走る、二筋の鋭い眼光。『黒いシェパード』。慶一氏が吐く歌は、永久(とわ)に生きる一行の詩。フロアは今や夜の川に浸り、闇の静寂を受け止めている。歩き続ける彼らを見つめる、無数の輝く瞳たち。旅の終わりは誰も知らない。いまだ大いなる途上。２０年目のアニバーサリー、この記念すべき日に刻まれた、まぎれもない足跡。

今、数えきれない愛を背中に受けながら、ゆっくりとステージを降りて行く６人の男たち。

揺れ続けるフロア。押さえきれない願望。彼らを再び呼び戻そうと、鳴りやまない拍手がもがいている。速まるばかりのビート。鼓動の高まりにテンポ・コントロールが効かない。何度も壊れ、そのたび蘇る、両手で打ち鳴らす４ビート。どれほど繰り返されただろう、寄せては返す大波のオーガズム。悲鳴となった叫びが飛び交う中、ステージの上に再び灯が燈りはじめる。

荒れ狂う歓声。溢れる笑顔。目を細めながらフロアを見渡す慶一氏。

「俺達、最近、約束破ってないから... 年内にニュー・アルバムを出しますので...」

ウォーッ！鼓膜をつんざく怒号のような叫び。もはや火山の火口と化したホール。

「ＣＤ－ＲＯＭも出します。あと、本も、出します... 今年はたくさん、お金を、使ってください(笑)... そんな、諸君に捧げます...」

２０年前と変わらない。２０年経って今も何も変わるわけがない。永遠のバッド・ボーイズ。『スカンピン』。時代がいくつ流れようとも、決して色褪せない想いがある。この胸に刻まれたあの日の痛み。彼らとともに蘇る無数の記憶。今宵、この曲を抱きしめてどこへ行こう。タバコの煙りに何を思い浮かべよう。

ギター・ソロが聞こえて来る。火の玉ボーイがステージを横切っていく。

「ギター、白井良明！」

端から端まで、かけがえのない友を訪ね歩く。一人一人の名前を誇らしげに口にする。共に歩いた遥かな道程。ベース、鈴木博文。ヴァイオリン、武川雅寛。ドラムス、かしぶち哲郎。キーボード、岡田徹。

長い間奏が終わろうとしていた。マイクの前に帰ってくる白髪混じりの少年。隣で迎える武川氏が、その大きな右手をかざして彼の名を告げる。

「鈴木慶一！」

言葉が無力になる瞬間。

僕は目の前の光景を脳裏に焼き付ける。溢れる想いを肋骨に刻みつける。

別れを告げるギターが鳴り響く。ホールに浮かぶ夕日のドック。湾岸キングに導かれ、無数の唄声が風を織り成していく。終わりは新たな始まりのために。この夜に染み渡る『くれない埠頭』。まっすぐにフロアを見据える６人の男たち。残したものも、残ったものも、何も無いはず。夢を見た日から走り続けて来た２０年。

燃え盛る火の粉のような歓声を浴びながら、彼らはステージを去っていく。誰の胸にも消せない記憶を残して。

フロアに明かりが燈る。全てが終わったことを告げられる。押さえきれない感情の嵐。隠しきれない枯渇感。拍手は一向に鳴りやもうとしない。荒れ狂う無数の叫び声。灯の消えたステージが、そのやるせない肢体をさらしている。壊された堤防。ホールは幸せの洪水に溺れている。

ドォーッ！突然吹きあがる火柱。津波となった歓声がステージに押し寄せる。満面の笑みを浮かべ、今また手を振りかざす６人の騎士たち。

「ありがとう。また年末に、来ます。必ず...」

１９９６年6月２２日。神戸チキンジョージ。２０ｔｈアニバーサリーのスペシャル・ナイト。

そこにいたのは最強のライブ・バンド。裸身の男たち。その名はムーンライダーズ。

今宵、彼らに出会えたことを最高の神に感謝したい。

語り継がれるであろう伝説の夜に。

Swing

（初稿 96/07/03 ニフティサーブ FBEAT20 ムーンライダーズ会議室）